

ヤサカ自動車(株)中央営業センター黄班 古都研 平成30年3月度 資料

島原・壬生寺・新撰組

平成30年3月16日 古都研実施

◎ 島原の文化史 ◎

◆ 島原の文化史的意義 ◆

島原の正式地名は「西新屋敷」ですが、官命により、寛永 18 年(1641)に前身にあたる六条三筋町から移され、その移転騒動が「あたかも島原の乱の如し」と流布したことにより、「島原」と呼ばれるようになりました。

島原は、寛永 18 年の開設以来、公許の花街(歌舞音曲を伴う遊宴の町)として発展してきましたが、単に遊宴だけを事とするにとどまらず、和歌や俳諧などの文芸が盛んで、江戸中期には島原俳壇が形成されるほどの活況を呈しました。

また、幕末には、女流歌人蓮月尼が島原を褒めた歌を遺すなど、女性にとっても親しい町でありました。ここが閉鎖的な江戸の吉原と大きく異なり、老若男女の出入りも自由で開放的な町であった所以です。

維新以降は、明治 6 年(1873)に歌舞練場が開設されるとともに、青柳踊や温習会が上演されましたが、立地条件の悪さのため除々にさびれてゆきました。

往事の賑わいは戻らないものの、花街としての営業は昭和 52 年(1977)までなされ、京都の六花街の一つに数えられておりました。

島原では、宴席の揚屋や茶屋と、太夫や芸妓を抱える置屋とに分かれる営業形態をとり、これを「送り込み制」と称します。

吉原などのいわゆる「遊廓」は自ら娼妓を抱えて営業を行います。こちらを「居稼ぎ制」と称します。

島原の営業形態は現在の祇園などに伝えられています。現在の花街は、すべて揚屋と同じ「送り込み制」をとっています。

したがって、島原は「いわゆる遊郭」の町でなく、「花街」というべき町であり、江戸中期には俳壇ができるなど京都文化の中心的役割を果たしていました。

◆ 島原の太夫について ◆

「太夫」とは傾城(けいせい 官許により遊宴の席で接待する女性)の最高位であり、舞の優れた傾城を「舞太夫」と呼んだことが太夫の始まりとされます。

歌舞音曲の芸はもとより、茶、花、和歌、俳諧などの教養を身に付けていました。その点が、芸を必要としない吉原の娼妓の最高位の「花魁(おいらん)」とは大きく異なったところがあります。

◆ 島原のQ&A ◆

Q.なぜ島原というのですか？

A.島原は、官命により、寛永18年(1641)に島原の前身である「六条三筋町」から現在地の朱雀野に移されました。

その移転騒動が、四、五年前に九州で起きた島原の乱を思わせたことから、「島原」と呼ばれるようになりましたが、正式地名は「西新屋敷」といいます。島原への移転した年を寛永17年とする説もありますが、それは移転命令の年で、実際の移転は翌18年のことでもあります。

Q.なぜ島原の地域名を花街(かがい)というのですか？

A.明治以降の歓楽街は、都市構造とは関係なく、業務内容で「花街」と「遊廓」の二つに分けられました。

「花街」は歌や舞を伴う遊宴の町であり、一方、「遊廓」は歌や舞もなく、宴会もしない、歓楽のみの町であります。島原は、囲郭的な都市構造でしたが、業務内容は歌舞音曲を伴う遊宴の町で、単に遊宴だけを事とするものではありません。

島原の町は、和歌俳諧等の文芸活動が盛んで、ことに江戸中期には島原俳壇が形成されるほどの活況を呈しました。明治6年には「花街」の象徴である歌舞練場が開設され、「青柳踊」「温習会」などが上演されました。このことから、歓楽専門で文化のない町である「遊廓」という用語では、島原を十分に理解することができません。ちなみに、遊廓には歌舞練場がありません。

Q.島原は江戸の吉原とどのように違いますか？

A.島原の入口は当初、東口の一つでしたが、その後西口ができるとともに、島原内に劇場が開設され一般女性も入ることができました。

島原は開放的な町で、天保13年(1842)以降は土堀や堀(かき揚げ堀)もなくなり、老若男女の誰でも出入りができました。そのため島原は360年間、放火による火事は皆無で、嘉永7年(1854)にわずか一回、失火によって、島原の東半分が焼失したのみであります。

島原は江戸時代、歌舞音曲を伴う遊宴の町であり、しかも明治以降、歌舞練場を備え、「青柳踊」「温習会」を上演していたことから「花街」となります。

それに対して、吉原は周囲に10メートル幅の堀を設け、入口を一つにして厳しい管理を行い、遊女を閉じ込めるなど閉鎖的な町でした。

その結果、逃げ出すための放火が多く、新吉原時代(1676～1866)の190年間に21回、明治期には7回もの大火が発生しています。

また、吉原は江戸時代、俳壇や歌壇が存在するなどということもない、歓楽専門の町でありました。明治以降も歌舞音曲を必要としない業務であったため、歌舞練場(演舞場)も持っていません。したがって、吉原は都市構造上からも、業務上からもまぎれもなく「遊廓」ということになります。

Q.揚屋と置屋の違いは？

A.揚屋は太夫や芸妓を抱えず、置屋から太夫、芸妓を派遣してもらって、お客様に遊宴をしていただくところであり、揚屋は料理を作っていましたので、現在の料亭、料理屋にあたります。

ただし、揚屋は江戸時代のみで、明治以降はお茶屋業に編入されます。一方、置屋は太夫や芸妓を抱え、揚屋に派遣します。置屋ではお客様を迎えませんでした。明治以降、お茶屋業も兼務する置屋では宴会業務も行うようになりました。

この揚屋と置屋の分業制を「送り込み制」といい、現在の祇園などの花街に、「お茶屋(宴席)」と「屋形(芸妓、舞妓を抱える店)」の制度として伝えられています。これに対して、吉原などの遊廓の店は自ら娼妓を抱えて歓楽のみの営業を行い、これを「居稼ぎ制」といいます。

Q.太夫と花魁(おいらん)の違いは？

A.太夫は、傾城(けいせい 官許により遊宴の席で接待する女性)の芸妓部門の最高位となります。

六条三筋町時代、四条河原で能や舞に明け暮れ、その中から優れた傾城を能太夫、舞太夫と呼んだことが、太夫の始まりとされています。

太夫は舞や音曲のほかに、お茶、お花、和歌、俳諧などの教養を身に付けていました。ところが、花魁は芸を披露しないため、歌舞音曲を必要としません。まさしく娼妓部門の最高位ということになります。

太夫と花魁との外見上の大きな違いは、帯の結び方でも分かります。太夫の帯は前に『心』と結ぶのに対して、花魁の帯は前にだらりと垂らして結びます。

Q.島原の範囲はどこまでですか？

A.現在の位置では、東の大門から西は千本通りまでの東西 194.9m、北は中央市場青果棟の南側道路から南は正面通り南一筋目の道路までの南北 242.1m であり、その面積は約 47,200㎡となります。

島原には六つの町内があります。その位置は大門から東西に走る道「道筋(どうすじ)」に沿って、一筋目に交差する北側の筋に「中之町(なかのちょう)」、その南側の筋に「上之町(かみのちょう)」、二筋目に交差する北側の筋に「中堂寺町(ちゅうどうじちょう)」、その南側の筋に「太夫町」、三筋目に交差する北側の筋に「下之町」、その南側の筋に「揚屋町」とそれぞれなっています。

「角屋もてなしの文化美術館」ホームページ(<http://sumiyaho.sakura.ne.jp/index.html>)より

◎ 角屋もてなしの文化美術館 ◎

◆ 角屋保存の意義 ◆

角屋の建物は揚屋建築の唯一の遺構として、国の重要文化財の指定を受けています。揚屋は今で言う料亭にあたりますが、角屋においては、その座敷、調度、庭のすべてが社寺の書院、客殿と同等のしつらいがなされ、江戸時代、京都において民間最大規模の饗宴の場でありました。

そこでは、単に歌舞音曲の遊宴のみならず、和歌や俳諧などの文芸の席があり文化サロンとしての役割も果たしていました。また、幕末には、勤皇、佐幕派双方の会合場所となり、維新の旧跡といえます。ただ、乱闘の現場になったことはありません。

以上の理由により、角屋を永久に保存する意義は十分にあると考えられます

◆ 角屋略史 ◆

寛永 18 年(1641) 六条三筋町から現在地に移築

延宝頃(1673～80) 北側へ拡張

天明 7 年(1787) 南側へ拡張(ほぼ現在の規模になる)

大正 15 年(1925) 大座敷松の間のみ小火により再建

昭和 27 年(1952) 重要文化財建造物に指定

◆ 揚屋建築の特徴 ◆

揚屋建築の特徴は、饗宴施設のため、大座敷に面した広庭に必ずお茶席を配するとともに、客振舞のために、寺院の庫裏と同規模の台所を備えることにあります。

◆ 揚屋の定義 ◆

揚屋は宝暦 7 年(1757)以降、京の島原と大坂の新町のみとなり、江戸の吉原では消滅した業種ということが世間に広く知られていません。揚屋は太夫や芸妓を抱えず、置屋から太夫などを派遣してもらい歌舞音曲を伴う遊宴によりお客様を歓待するところであります。揚屋の定義は、江戸時代の書物に「饗業の店」として次のように記されています。

◆ 角屋のQ&A ◆

Q.角屋は遊廓の店ですか？

A.角屋は遊廓の店ではなく、今の料亭にあたる揚屋(あげや)という業種の店です。揚屋には太夫や芸妓を抱えず、置屋から派遣してもらって、お客様に歌舞音曲の遊宴を楽しんでいただくところです。揚屋は江戸時代、民間最大の宴会場でした。そこでは遊宴のみならず、お茶会や句会なども行われ、文化サロンとしての役割も果たしていました。そのため、揚屋建築は、大座敷に面した広庭に必ず茶席を設け、庫裏と同規模の台所を備えていることを特徴とします。ちなみに、いわゆる遊廓の店には、大座敷、広庭、茶席などはなく、ほとんどが小部屋のみの構造であります。

Q.なぜ揚屋というのですか？

A.江戸初期から中期までの揚屋は、間口が狭く、奥行きのある小規模の建物であったため、一階を台所および居住部分とし、二階を主たる座敷としました。その二階へお客様を揚げることから「揚屋」と呼ぶようになりました。やがて江戸中期の宝暦(1751～1763)以降、京都や大坂の揚屋は隣接地を買い増し、天明4年(1784)には揚屋のほとんどが一階を主たる座敷にして大座敷や広庭を備え、大宴会場へと特化してゆきます。一方江戸の吉原では宝暦7年(1757)を最後に揚屋が消滅し、揚屋のない町に変化しました。

Q.いつまで営業していましたか？

A.揚屋としては明治5年(1872)まで営業し、それ以降はお茶屋業に編入されました。お茶屋業としては、昭和60年(1985)まで「松の間」において宴会業務を行っていました。また、揚屋は「一見さん」(紹介のない方)を迎えることがなく、支払いは「つけ(掛売り)」のみで、現金決済を行いませんでした。

Q.なぜ格子造りの外観になっているのですか？

A.角屋の外観の格子は、近世初期の京都町屋に広く使用されていた格子のすがたを伝えています。したがって、江戸吉原の花魁(おいらん)を見せるための牢屋のような格子(籬 まがき)では決してありません。

Q.なぜ赤壁になっているのですか？

A.角屋の壁は赤色がすべてではありません。赤壁の他に、白漆喰(しっくい)壁、黄色の大津磨き壁、浅葱(あさぎ)色(ブルーグレー)の九条土壁、淡い茶褐色(ベージュ)の聚楽土壁があります。赤壁はもともと揚屋など花街の壁ではありません。角屋より古い建造物を調べますと、社寺の書院、客殿に使用された高級壁であることが判明しました。揚屋がそうした高級壁を用いることによって、並みの建物でないことを示したものと思われます。また、赤壁は華やかなものですから、祇園などの花街に多く用いられています。

Q.なぜ室内は真っ黒に煤けているのですか？

A.昔の照明には、蠟燭を灯す燭台や灯油の行灯が用いられました。室内を明るくするためには、たくさんの蠟燭を灯すことが必要でした。その結果、油煙で天井、襖などの室内が真っ黒に煤けたのであります。ちなみに、角屋を訪れた司馬江漢の日記には「燭台数十、昼の如く照らす。」とあります。

◎ 壬生寺 ◎

◆ 壬生寺の歴史 ◆

壬生寺は正暦2年(991)、園城寺(三井寺)の快賢僧都によって創建され、古い名を地蔵院、宝幢三昧寺、などと号した。

宗派は、南都六宗の一つである律宗に属している。昭和37年(1962)、本堂を全焼し本尊地蔵菩薩像を含む多数の寺宝を失った。

しかし新しい本尊延命地蔵菩薩立像(重要文化財)が、律宗 総本山唐招提寺から移されて、昭和45年(1970)に本堂の落慶法要が行われた。

五仏錫杖頭(重要文化財)や列仙図屏風(長谷川等伯筆・重要文化財)、室町時代の作を含む190点の狂言の仮面などの寺宝を今に伝え、年間法要や700年の伝統を持つ壬生狂言(重要無形民俗文化財)は絶えることなく行なっている。

新選組ゆかりの寺でもあり、境内の壬生塚には新選組隊士の墓塔をまつている。

また、都市中心部の境内地を活用して、保育所「壬生寺保育園」や特別養護老人ホーム「壬生老人ホーム」、有料老人ホーム「ウエルエイジみぶ」があり、社会福祉事業も進めている。

◆ 壬生寺ご本尊のご利益 ◆

壬生寺のご本尊は、延命地蔵菩薩像である。

詳しくご利益を述べれば『仏説延命地蔵菩薩経』に十益(じゅうえき)を授けられると信仰されている。

1. 女人泰産(安産を授かる)
2. 身根具足(丈夫な体を授かる)
3. 衆病悉除(病気が平癒する)
4. 寿命長遠(長生きを授かる)
5. 聡明知恵(知恵を授かる)
6. 財宝盈溢(金持ちになれる)
7. 衆人愛敬(誰からも敬愛される)
8. 穀米成就(穀物が実る)
9. 神明加護(神々の加護が得られる)
10. 大菩提証(偉大な悟りを得て極楽に行ける)

平安時代、白河天皇にあつく信仰され、また、壬生寺が京都の裏鬼門にあたることから、天皇の発願によって、毎年2月に節分厄除大法会が始められた。

以来、厄除・開運の寺として庶民の信仰を集めている。

境内には、水掛け地蔵をはじめとする石仏が約三千体まつられている。その一部の石仏は、八月下旬に京都市内各地で行われる「地蔵盆」に貸し出し地蔵として、貸し出される。

これは、地蔵が無い新興住宅地の町内から、地蔵盆の期間に当寺の石仏を貸して欲しいとの依頼があり始められたもので、50年以上の歴史がある。マスコミでは、レンタル地蔵と現代風に呼ばれているが、出開帳に基づく伝統行事である。

このように、創建より地蔵菩薩をまつり、地蔵信仰をひろめる寺として今日に至る。

◆ 壬生寺と新選組 ◆

・壬生塚

壬生寺境内東方にある池の中の島は、壬生塚と呼ばれ、幕末の新選組隊士の墓などがある。新選組局長・近藤 勇の胸像と遺髪塔、新選組屯所で暗殺された隊士・芹沢鴨と平山五郎の墓、勘定方・河合耆三郎の墓の他、隊士7名の合祀墓がある。その合祀墓には池田屋騒動で亡くなった隊士・奥沢栄助、安藤早太郎、新田革左衛門らも葬られている。

・新選組の結成

新選組は文久3年(1863)3月に、ここ壬生の地において結成された。東門前の坊城通りには、その当時、八木邸、前川邸、南部邸の3箇所が屯所と定められ、今も八木邸と前川邸が残っている。かつて壬生寺境内は新選組の兵法訓練場に使用され、武芸や大砲の訓練が行なわれたという。

・数々残る隊士の逸話

一番隊組長・沖田総司が境内で子供達を集めて遊んだり、近藤勇をはじめ隊士が壬生狂言を観賞したり、新選組が相撲興行を壬生寺で企画し、寺の放生池の魚やすっぽんを採って料理し、力士に振る舞ったという、面白い逸話も当寺に残っている。境内にある壬生塚には、新選組やその遺族らによって建てられた墓碑4基がある。

・新選組隊士等慰霊供養祭

毎年7月16日には池田屋騒動の日をとし、「新選組隊士等慰霊供養祭」がここで行われる。当日は全国各地から新選組を参詣者が数多く訪れ、近藤勇の胸像前で慰霊法要が行われた後、有志による剣技や詩吟の披露がある。参加自由であるので、どうか参詣していただきたい。また、近藤勇の胸像のななめ前に「新選組顕彰碑」がある。これは京都で活動している「新選組同好会」が、結成20周年を記念して平成7年に建てたものである。さらに往年の名歌手、故・三橋美智也氏の代表歌「ああ新選組」が平成11年(1999)に建立された。

・新選組屯所跡

壬生寺正門北には現在も八木邸(京都市指定文化財)、前川邸二箇所の新選組屯所跡が、当時のままの形で残っており、それぞれ住人のご尽力により管理保存されている。寺の正門前の坊城通りを北へ、和菓子店「京都鶴屋」の奥に、八木邸がある。この八木邸において、芹沢鴨らが暗殺された。現在は内部が一般公開されている。前川邸は坊城通り綾小路の東南角にあり、現在は「田野製袋所」となっており、土日のみ一部を一般公開はされている。前川邸には八木邸を屯所としてから程無く、分宿するようになった。新選組は慶応元年2月に西本願寺に屯所を移転する。壬生に屯所をかまえたのは2年あまりにすぎなかった。しかし、その後も隊士は前述のように壬生寺で兵法訓練をしたり、壬生の地をしばしば訪れている。新選組隊士を「壬生浪士」とも呼ぶのは、この壬生屯所での新選組の活躍が広く知られたためであろう。ここに記した以外にも様々な説があるので、必ずしもこの限りではないことをお断りしておく。

参考文献・『新選組大事典』(新人物往来社)・『血誠新選組』(学習研究社)など。

壬生寺学芸員 松浦康昭

◆ 壬生狂言(重要無形民俗文化財) ◆

• 壬生狂言について

壬生狂言を正しくは「壬生大念佛狂言」と言い「壬生さんのカンデンデン」という愛称と共に、古来から京の庶民大衆に親しまれてきました。この壬生狂言は今から700年前の鎌倉時代、壬生寺を大いに興隆した円覚上人(1223～1311)が創始されたものです。

• 壬生狂言のはじまり

当時、円覚(えんがく)上人(しょうにん)の教えを来聴する大衆が数十万人にも及んだので、人々は上人を「十万(じゅうまん)上人(しょうにん)」と呼んでいました。上人は、正安2年(1300)、壬生寺において「大念佛会(だいにんぶつえ)」という法会を行いました。この時に上人は、拡声器とてない昔、群衆を前にして最もわかりやすい方法で仏の教えを説こうとしました。そして、身ぶり手ぶりのパントマイム(無言劇)に仕組んだ持斎融通(じさいゆうづう)念佛を考えついたのです。これが壬生狂言の始まりと伝えられています。

• せりふを用いない宗教劇

近世に入ると庶民大衆の娯楽としても発展し、本来の宗教劇のみならず、能や物語などから色々と新しく取材され、曲目やその数も変遷して現在上演されるものは、30曲であります。しかし、一般の能狂言とは異なり、かね・太鼓・笛の囃子に合わせ、すべての演者が仮面をつけ、一切「せりふ」を用いず無言で演じられる壬生狂言の形は変わらず、娯楽的な演目の中にも勧善懲悪、因果応報の理を教える宗教劇としての性格を今日まで残しています。

• 壬生大念佛会

壬生狂言の春の公開「壬生大念佛会」は、壬生寺の年中行事の法要であって狂言は本来この期間、朝・昼・夜の勤行(ごんぎょう)のうちの昼の勤行として、壬生大念佛講が、壬生寺の御本尊である延命地藏菩薩に奉納するものであります。この法要は正安2年以来、約700年間も途絶えることなく、連綿と続けられてきたのです。その宗教性を皆様に理解していただくために毎年最終日の夜の部において「結願式(けちがんしき)」の公開を行っております。

• 秋の公開

秋の公開は、もともと臨時的に行われていたもので、明治4年を最後に103年間も途絶えていましたが、狂言の発展や後継者養成のため、昭和49年に復活されました。以来、秋の特別公開として、毎年特に人気の高い番組を上演しています。

・節分の公開

節分の公開は、春の大念佛会のさきがけとして、さらに壬生寺節分会(せつぶんえ)の参詣者の厄除・開運を祈願し、壬生狂言の『節分』を繰り返し上演するものです。

・重要無形民俗文化財

時代が変わり、近年は民俗文化財としての評価が高まり、昭和 51 年に国の重要無形民俗文化財として、京都府下では第一番に指定を受けました。また、狂言を演ずる大念佛堂(狂言堂)は、安政 3 年(1856)の再建ですが、綱わたりの芸をする「獣台(けものだい)」や鬼などが飛び込んで消える「飛び込み」などの装置を持つ、他に類例を見ない特異な建造物として、昭和 55 年に国の重要文化財として指定され、昭和 58 年から 2 年半にわたり解体修理が行われました。その他、収蔵する仮面は室町時代から現代の作まで、約 190 点あり、衣裳・小道具は江戸時代のものを含めて数百点を数えます。近年、それらの保存や復元が年々難しくなる傾向にある中、その事業は着々と進められています。

・壬生大念佛講

この壬狂言を伝承して演じるのは、「壬生大念佛講(こう)」の人達です。講員は、壬生狂言がその職業ではなく、会社員、自営業などの本職をもち、小学生から70歳台の長老まで、おもに地元に住居する約35名(「衣裳方(かた)」と呼ばれる衣裳の着付担当者以外は全員が男性)が狂言を演じています。近年は東京、宮城、福岡、沖縄、ハワイなどからも招聘を受けて出張特別公演を行い、数多くの結縁を得るとともに識者の関心を集めています。

壬生寺ホームページ(<http://www.mibudera.com/>)より

【参考】京都 清宗根付館

「京都 清宗根付館」は根付に関する美術館です。江戸時代、印籠・煙草入れ・胴乱・巾着などの「提げ物」を携帯する際、紛失や盗難を防ぐ必要から発明されたのが『根付』です。当美術館では 4500 点を超えるコレクションの中から現代根付を中心に約 400 点を展示しております。江戸時代後期(文政 3 年)に建てられた京都市 指定有形文化財の武家屋敷「旧神先家住宅」の中で日本の伝統美『根付』を心ゆくまでご鑑賞下さい。

江戸時代、印籠・矢立て・煙草入れ・袋などの「提げ物」を携帯する際、その紛失や盗難を防ぐ必要から発明されたのが「根付」です。提げ物を紐で帯に吊し、もう一方の先に根付を取り付けて留具としました。象牙や牛の角など動物の骨、陶器や金属を素材として、日本人独特の器用さで精巧な彫刻が施されています。の武家屋敷「旧神先家住宅」の中で日本の伝統美『根付』を心ゆくまでご鑑賞下さい。

「京都 清宗根付館」ホームページ(<https://www.netsukekan.jp/>)より

なお、京都 清宗根付館は壬生寺東側 仏光寺通り沿いにあります。

◎ 新撰組について ◎

幕末の文久3年(1863年)春、14代将軍家茂上洛にあたりその警護の為に上洛した浪士達は、ここ洛西壬生村に宿所を求めましたが、間もなく江戸に呼び戻されることになりました。

しかしその中で当八木家を宿所としていた芹澤鳴、近藤勇、土方歳三、沖田総司、山南敬助、新見錦、原田佐之助、藤堂平助、野口健司、井上源三郎、平山五郎、平間重助、永倉新八の13名は浪士隊から分かれて京に残り、文久3年3月16日八木家右門柱に、松平肥後守御領新撰組宿という新しい表札を掲げ、ここに新撰組が誕生したのです。

当時、当家は11代八木源之丞應迅と申しました。その後しだいに隊士も増え当家では賄いきれず前川家や南部家にも宿所を当てていました。

当家奥座敷は新撰組三大内部抗争の一つ芹澤鳴暗殺の場で、文久3年9月18日どしゃ降りの深夜芹澤鳴、平山五郎ら4人が斬殺されました。現存する刀傷の一部がその凄惨さを物語っています。

こうして近藤が実権をにぎってから隊規も厳しくなり、又池田屋事件など新撰組の最盛期を築きましたが、慶應元年(1865年)夏、壬生が手狭になってきたのを理由に西本願寺の太鼓番屋に屯所を移しました。その後、鳥羽伏見の戦いで敗れるまで壬生を洋式調練の場所にするなどして江戸に下る最後まで深い繋がりがありました。

壬生に生まれ幕末京都の治安を守った新撰組。あしかけ3年の新撰組壬生屯所時代。これが真の新撰組のすがたではないでしょうか。

◆ 壬生屯所旧跡(京都市指定有形文化財) ◆

八木家は壬生村きっての旧家でかつて壬生郷士(壬生住人士)の長老をつとめていた。また幕末には新撰組の近藤勇、土方歳三らの宿所となり旧壬生屯所として知られている。

建物は長屋門が東に開きその奥に主屋が南面して建つ。当家に残る普請願から長屋門が文化元年(1804年)主屋は文化六年の造営と知られる。主屋は西端に土間を奥まで通し、土間に沿って居室を三室ずつ二列に配する。入口は土間部分に開くほか東南隅に式台を備えた本玄関を配しての北に仏間奥座敷を一行に並べて格式ある構成をとっている。長屋門の外観は腰に下見板を張り与力窓や出格子窓を開くなど昔のおもかげをよく残している。

壬生地区は今日市街化が著しいが、かつては洛中に近接した農村であり、当家は幕末期の遺構として、また新撰組ゆかりの建築として貴重であり、昭和58年6月1日京都市指定有形文化財に指定された。

八木邸ホームページ(<http://www.mibu-yagike.jp/>)より

八木邸について

◆ 八木家の歴史 ◆

八木家には元々但馬の国(兵庫県養父郡朝倉の庄)に祖を発し、鎌倉時代初期に、遠祖より八木安高によりて起りました。

源頼朝の富士の裾野の巻狩りの時、関東一円を震撼させた白い猪を射止めた功績で、頼朝より今の家紋(三つ木瓜)を拝領したと云われます。(鎌倉武鑑)十数代の後、越前朝倉を経て天正年間中(室町時代)に、京・洛西壬生村に居を構え、江戸時代には十家程の郷士(壬生住人士)と共に、村の経営や壬生狂言に携わり、代々村の行司役をも勤めていました。

又、壬生村と京都守護職や所司代とも大変深い関わりがありました。(八木家、前川家文書)

幕末になり、江戸より浪士を預かり、後の“新選組”発足も京都守護職や所司代との関係であったことが伺われます。

壬生は往古より湧水の出ずるところで、水質にも大変恵まれ、壬生菜、菜種、藍などの産地でもありました。

その藍で染めた水色は壬生の色でもあり、壬生狂言に使用する手拭いの色にも古くから使用されています。新選組が使っている羽織の段だら模様の水色は、この壬生の色を拝借したものです。当家は、天正年間より当代まで15代を数え、代々血脈相続しています。

◆ 八木家と新選組 ◆

幕末の文久二年(1862)に清川八郎の提案により、幕府が上洛する十四代徳川家茂の警護の為に集めた浪士隊を前身としています。翌年上洛した浪士隊は結果分裂し、京都に残った一部が京都守護職松平容保のお預かりとする形で結成されました。その後芹沢一派等の粛清を経て局長近藤勇、副長土方歳三の体制で落ち着き、主に京都の治安を守る為の警察部隊でした。

彼らを一躍有名にしたのが「池田屋事件」でした。過激派浪士が都に火をかけ、その混乱に乗じて天皇を長州に拉致するという計画を企てていました。それを察知した近藤らは、木屋町三条の池田屋を襲撃、7人を斬殺、23人を捕縛しました。彼らの活躍により、京の都が火の海にならずにすんだのです。

明治元年「鳥羽・伏見の戦い」において幕府軍に参加して戦いましたが敗北し、江戸に逃れた後、各地を転戦しましたが、同年四月近藤は板橋で斬首、土方も明治二年函館の五稜郭郊外での戦闘で戦死しました。

◆ 新選組に関連するストーリー ◆

概要

幕末の京都は政治の中心地であり、諸藩から尊王攘夷・倒幕運動の志士が集まり、従来から京都の治安維持にあっていた京都所司代と京都町奉行だけでは防ぎきれないと判断した幕府は、清河八郎による献策で浪士組の結成を企図。

江戸で求人した後、京に移動した。しかし①清河八郎の演説でその本意を知った、近藤勇や芹沢鴨らが反発、京都守護職の会津藩主、松平容保の庇護のもと、新撰組として発足した。

同様の配下の京都見廻組が幕臣(旗本、御家人)で構成された正規組織であったのに対して、新選組は浪士(町人、農民身分を含む)で構成された「会津藩預かり」という非正規組織であった。

隊員数は、前身である壬生浪士組 24 名から発足し、新選組の最盛時には 200 名を超えた。任務は、京都で活動する不逞浪士や倒幕志士の搜索・捕縛、担当地域の巡察・警備、反乱の鎮圧などであった。

その一方で、商家から強引に資金を提供させたり、隊の規則違反者を次々に粛清したりするなど内部抗争を繰り返した。

慶応 3 年(1867 年)6 月に幕臣に取り立てられる。翌年に戊辰戦争が始まると、旧幕府軍に従い転戦したが、同戦争終戦と共に解散した。

1. 新選組の結成

文久 2 年(1862 年)、江戸幕府は庄内藩郷士・清河八郎の建策を受け入れ、将軍・徳川家茂の上洛に際して、将軍警護の名目で浪士を募集。

翌文久 3 年(1863 年)2 月 27 日、集まった 200 名余りの浪士たちは将軍上洛に先がけ「浪士組」として一団を成し、中山道を西上する。

京都に到着後、②清河が勤王勢力と通じ、浪士組を天皇配下の兵力にしようとする画策が発覚する。浪士取締役の協議の結果、清河の計画を阻止するために浪士組は江戸に戻る事となった。

これに対し近藤勇、土方歳三を中心とする試衛館派と、芹沢鴨を中心とする水戸派は、あくまでも将軍警護のための京都残留を主張。

公武合体に基づく攘夷断行の実現に助力することを目的とし、新選組の前身である「壬生浪士組」を結成。

壬生浪士組は③壬生村の八木邸や前川邸などを屯所とし、第一次の隊士募集を行う。その結果 36 名余の集団となり、京都守護職の松平容保から、主に不逞浪士の取り締まりと市中警備を任される。

壬生浪士組は八月十八日の政変の警備に出動し、その働きを評価される。そして、新たな隊名「新選組」を拝命する。

④近藤・土方ら試衛館派が八木邸で芹沢鴨、平山五郎を暗殺。平間重助は脱走、野口健司は 12 月に切腹。水戸派は一掃され、試衛館派が組を掌握し近藤を頂点とする組織を整備した。

元治元年(1864年)池田屋事件で尊王攘夷派志士を斬殺・捕縛。

禁門の変の鎮圧に参加。

池田屋事件と禁門の変の働きで朝廷・幕府・会津藩から感状と200両余りの恩賞を下賜されると、同年9月に第二次の隊士募集を行い、更に近藤が江戸へ帰郷した際に伊東甲子太郎らの一派を入隊させる。新選組は200名を超す集団へと成長し、隊士を収容するために壬生屯所から西本願寺へ本拠を移転する。

慶応3年(1867年)伊東甲子太郎らの一派が思想の違いなどから御陵衛士を結成して脱退。同年6月、新選組は幕臣に取り立てられる。同年11月、⑤御陵衛士を襲撃し、伊東らを暗殺する(油小路事件)

慶応3年(1867年)10月に将軍・徳川慶喜が大政奉還を行った。新選組は旧幕府軍に従い戊辰戦争に参加するが、初戦の鳥羽・伏見の戦いで新政府軍に敗北。榎本武揚が率いる幕府所有の軍艦で江戸へ撤退する。

この時期、戦局の不利を悟った隊士たちが相次いで脱走し、戦力が低下した。

【参考】

その後、幕府から新政府軍の甲府進軍を阻止する任務を与えられ、甲陽鎮撫隊と名を改め甲州街道を甲府城へ進軍するが、その途中甲州勝沼の戦いにおいて新政府軍に敗退する。

再び江戸に戻ったが、方針の違いから永倉新八、原田左之助らが離隊して靖兵隊を結成。

近藤、土方らは再起をかけ、流山へ移動するが、近藤が新政府軍に捕われ処刑され、沖田総司も持病だった肺結核により江戸にて死亡。また諸事情で江戸に戻った原田は彰義隊に加入し上野戦争で戦死した(諸説あり)。

新選組は宇都宮城の戦い、会津戦争などに参加するが、会津では斎藤一らが離隊。残る隊士たちは蝦夷地へ向かった榎本らに合流し、二股口の戦い等で活躍する。

新政府軍が箱館に進軍しており、弁天台場で新政府軍と戦っていた隊士たちを助けようと土方ら数名が助けに向かうが、土方が銃弾に当たり戦死し、食料や水も尽きてきたため、新選組は降伏した。旧幕府軍は箱館の五稜郭において新政府軍に降伏した(箱館戦争)。

補足

清河八郎の演説

幕府を補佐するためにと清河が働きかけて結成された浪士隊。あろうことかその張本人の清河が尊王派と通じて討幕を画策していた。その裏切りの演説を打ったのが壬生寺の前にある新徳寺だ。

壬生村の屯所

徳川家茂警護のために結成され上洛した浪士組の隊士達は壬生の新徳寺や壬生寺の他、八木邸や前川邸などの民家にも分宿していた。

新徳寺は清河をはじめとした幹部の本陣とし使われ、八木邸には芹沢一派、前川邸には近藤や土方、沖田らが分宿した。

芹沢鴨、平山五郎暗殺

この暗殺事件の前に島原の角屋で隊士達は宴席をもっていたと伝わる。芹沢鴨達はおそらく当時のタクシーである駕籠を使って八木邸に帰り、泥酔したところを切り殺されたのだろう。

何せ芹沢鴨は女癖と酒癖が悪かったそうだ。その時の刀キズが今も残る。角屋から壬生の八木邸まで駕籠に乗って酔っぱらって帰る姿を想像してみてほしい。今にも通じるでしょ。

因みに島原は日本で一番古い遊郭で新選組隊士の遊び場としても知られる。角屋は江戸期の饗宴の場である揚屋建築の遺構。

油小路事件

油小路事件を示す石碑が七条油小路付近にあります。伊東の遺骸は七条油小路の辻に置かれ、遺骸を引き取りに来た伊東の腹心・藤堂平助らも待ち伏せしていた新選組に襲われて討死しました。何気なく通っている場所がそんなところだったとは。少し違ってみえませんか？